# アドバイザーのご紹介

内藤廣（ないとう・ひろし）氏　（1950年 横浜市生まれ）
建築家・東京大学名誉教授
1976年早稲田大学大学院修士課程修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年に内藤廣建築設計事務所を設立。
2001～11年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻にて教授、同大学にて副学長を歴任。2011年～同大学名誉教授。2007～09年度には、グッドデザイン賞審査委員長を務めました。主な公職に、東京都景観審議会計画部会委員などがあり、特に関わりのある開発エリアとして渋谷駅、新宿駅、品川駅、名古屋駅、札幌駅などがあります。また、日向市、加賀市、鎌倉市、各務原市などの景観・まちづくりなどにも学識者として関わってきました。
代表作には、海の博物館、牧野富太郎記念館、島根県芸術文化センター、虎屋京都店、静岡県草薙総合運動場体育館、富山県美術館、とらや赤坂店、高田松原津波復興祈念公園　国立 追悼・祈念施設、東京メトロ銀座線渋谷駅、京都鳩居堂などがあります。
近著に『検証　平成建築史』（日経BP社）、『クロノデザイン』（彰国社）、『内藤廣設計図集』（オーム社）、『空間のちから』（王国社）、『建築の難問　～新しい凡庸さのために』など。

伊藤 毅（いとう・たけし）氏　（1952年 京都市生まれ）
東京大学名誉教授・青山学院大学客員教授・元都市史学会会長・建築史学会会長
建築史と都市史をつなぐ仕事をしてきました。その学際的交流の場として、2013年、わが国初の都市史学会（http://suth.jp）を仲間と創設しました。現在、都市や農村という区別ではなく大地の広がりや海域・流域などを全体的に捉える「領域史」に取り組んでいます。そのなかで、大地のひとつの極としてのあり方を示す島嶼や荒れ地、水と陸の中間形態としての沼地に強い関心を抱いています。コロナ禍前は、アイルランド西端のアラン諸島、氷河と火山が大部分を占める荒れ地アイスランド、地中海の聖域サルデーニア、弧状に島嶼が連担するカリブ海のアンティル諸島などを経巡っていました。災害と隣り合わせのこうした領域のあり方が、現在の最重要テーマとなっています（伊藤毅他編著『危機と都市－Along the Water』左右社、2017年）。柴又では文化的景観選定のための調査を行わせていただき、その文化や景観のすばらしさは言うまでもなく、領域史の観点からみても、またとない場所だと考えています。
近著では、伊藤毅編『イタリアの中世都市－アゾロの建築から領域まで』（鹿島出版会、2020年）、同編『フリースラント－オランダ低地地方の建築・都市・領域』（中央公論美術出版、2020年）、都市史学会編（伊藤毅編集代表）『日本都市史・建築史事典』（丸善出版、2019年）など。